

陳 情 文 書 表

受 理 番 号	第 16 号
受 理 年 月 日	令和4年9月15日
件 名	短縮アンコールを桐生発の文化運動にする陳情
陳情者の住所 及び氏名	桐生市相生町5-385-1レオパレスアヴニール101 寺口まさのぶ
陳 情 の 要 旨	<p>コロナ・ウイルスとの闘いによる密閉・密集・密接を避け、検温・換気・消毒・マスク着用・閉鎖空間での会話を控えるといった「新しい生活様式」は定着しつつある。</p> <p>コロナ禍では文化行事の面でも変化があった。①体調の事前申告、②ステージの前は五列ほど無観客に、③上演時間の短縮化、④途中休憩による換気、⑤ブラボー等の歓声禁止、⑥演劇ではフィナーレの割愛・縮小、⑦演奏者・出演者による終了後のお見送りは無し…等である。</p> <p>さらに新たに⑧として、「短縮アンコール」がある。</p> <p>通常、予定の演目が終了し拍手が沸く中を、出演者はいったん舞台のソデに引っ込む。拍手が続くと再び登場してもう一曲。これがコロナ禍以前のアンコールだ。</p> <p>ところが令和2年9月13日、ハープとヴァイオリンのコンサートが桐生であった。</p> <p>演奏終了の拍手の中、演奏者は「この拍手はアンコールの拍手と判断し、即この場でもう一曲演奏します」と宣言。</p> <p>聴衆は前代未聞の短縮アンコールにびっくり状態だった。でもコロナ禍では理にかなった合理的な判断である。翌年にはウクレレのコンサートでもこれがあり、今年はギターでもあった。</p> <p>ハープとヴァイオリンのコンサートは2年ぶりにこの9月にも催され、やはりアンコールにはその場で応える短縮形式だった。音楽ファン、音楽関係者に短縮アンコールは当然視され、何の違和感もない。もはや桐生では短縮アンコールは流布されているとみるべきである。</p> <p>コロナ禍を奇貨として、短縮アンコールを桐生発の文化運動に発展させようではありませんか。</p> <p>舞台と客席の新しい潮流を桐生から広げていきましょう。</p> <p>市内の文化会場は出演者に積極的に推奨していただきたいと思う。</p> <p>また、初めて短縮アンコールが行われた9月13日を記念日に制定してください。</p>
付 託 委 員 会	教育民生委員会
審 査 結 果	